

第1章 理念・目的

【大谷大学】

本学は、点検・評価項目のもとに独自の評価の視点を定め、点検・評価を行った。その評価項目の視点を小見出しにして本章の評価項目(2)を記述する。

1、現状の説明

(1)大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。

【大学全体】【文学部】

大谷大学は、仏教精神、中でも特に親鸞によって浄土真宗として明らかにされた精神を根幹とする大学である。序章でも述べたように 1901 年、政治文化の中心であった東京巢鴨の地に真宗大学として開校した際、初代学長清沢満之が述べた「開校の辞」と、第三代学長佐々木月樵が 1925 年、入学者宣誓式で講演した「大谷大学樹立の精神」とを、建学の理念を示すものとして堅持してきている。

初代学長清沢満之は、「開校の辞」において、以下のように述べている（資料 1-1 本学 HP「開校の辞」）。

「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。…後略…」

本学は「浄土真宗の学場」としての「宗教学校」であり、そのめざすべき所は「自己の信念の確立」と「其の信仰を他に伝える、即ち、自信教人信の誠を尽くすべき人物」の養成である。「自己の信念の確立」とは人間としての自己を知ると同時に自己の生きる立脚地を確立することである。したがって、清沢が述べている本学の理念は、「人間としての自己を問うことによって自己を知り自らの立脚地を確立するとともに、みずから学びえた信念を積極的に他者に伝えていくことを使命とするような人物の養成」ということである。

この清沢の精神を受けとめ、本学の建学の理念として更に敷衍したのが、第三代学長佐々木月樵である。佐々木が 1925 年、入学者宣誓式で表明した「大谷大学樹立の精神」の中から、本学の建学の理念に深く関わる部分を以下抜粋する（資料 1-2 本学 HP「大学樹立の精神」）。

「そもそも、国民の精神的要素は、いふまでもなく宗教と教育とである。然も、教育は常に宗教を俟つて真実の人格を作り、宗教は教育によつてのみ常にその陥り易き所の迷信に陥ることを防ぐのである。…中略… 本大学が専ら世間の官公私立大学及び各宗大学等とも大にその趣を異にする点は、本大学は先ず以て仏教学を以て諸学の首位とし、また之を中心として教授し研究する所にある。…中略… 仏教が万人の宗教である已上は、その仏教学も、また必ず万人の学たることをそれ自身要求して居る。これやがて、本大学が、仏教を学界に解放し、直接に間接に之を世間に普及するべく勉むる所以である。…中略… 諸子は今後益々本学に於ける人格陶冶の三モットーたる所の、本務遂行、相互敬愛、及び人格純真の三条に心をよせ、各自純真の人間となつていただきたいのである。諸子の学問及び人格の完成が、また本学の完成である。」

佐々木は、本学は宗教と教育との両輪によって「真実の人格を作る」ことにその学びの特徴があることをまず述べる。そのうえで、本学において「真実の人格を作る」教育を、仏教を中心に据えて行うこと、そのために本学における仏教学および真宗学は、全ての人々に、またさまざまな学問へと開かれた学となるべきことが表明されている。そのような仏

第1章 理念・目的

【大谷大学】

教学、真宗学を根本に据える本学が願う所は、本学に学ぶ者が、各自の学びをとおして、純真なる人格の形成をめざし、相互に敬愛できる社会の形成をめざして本務を遂行する人間として誕生することであると述べ、佐々木は「樹立の精神」を結ぶのである。

上記二つの宣言を簡潔にまとめるならば、仏教精神に基づく人格の陶冶（建学の理念の教育的側面）と、仏教の学界（世界）への解放（建学の理念の研究・学問的側面）という二つの側面が、本学の建学の理念の内実ということになる。

本学は、このような建学の理念のもとに文学部を設置している。つまり、上記における本学の理念はそのまま本学部の理念である。このことを受け、本学文学部の目的を「大谷大学学則」において以下のように記している（資料 1-3「大谷大学学則」第1条）。

「本学は教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献することを目的とする。」

こうした目的を実現するため本学部に9学科を設置している。

また、このような本学の理念と目的のもと、本学の中長期計画を明確にするため、2012年4月1日から2022年3月31日の10年間を対象として、「大谷大学・大谷大学大学院・大谷大学短期大学部グランドデザイン」（以下「グランドデザイン」と表記）を策定した（資料 1-4「グランドデザイン【2012年度—2021年度】」）。

この「グランドデザイン」は、本学の歴史的経緯を踏まえ、現状の社会状況に鑑み、2011年にまとめたものである。そこでは「高齢化社会や少子化による人口減少など、様々な問題に直面する現在の日本において、真宗・仏教を基盤として人間の真の立脚地を問う人物を養成する本学の建学の理念はますます重要となりつつある。ゆえに我々は、『人間学』を基礎にした人文諸学科における学びを通じて、価値観・人生観の動揺する現代社会の只中において、人間の確固たる生き方を探求する独立者の育成が本学の使命であることを確認する。」として、学術研究の場であると同時に人間形成の場としての本学のめざすべき方向性を明示している。

また、「10年後のビジョン・目的」において、「仏教精神に基づき、社会を主体的に生きることのできる人物を育成する」という基本目的を設定し、「教育職員・事務職員一体となって、その実現に向けた取組を進める」ことを確認している。

更に、グランドデザインの結びには「『人間学』を基礎とする学びをコミュニケーション能力の涵養において展開することにより、自己を見つめつつ、他者と共に社会の確かな歩みに寄与する人物を養成してゆきたい。それは、本学学生と教職員が自信と誇りと責任を持ってそれぞれの本務を遂行するところに実現されるであろう。」と10年後の大学のビジョンを示している。

この具体化にあたっては、大学運営会議、教育推進室での議論を経て、2014年度から上記「コミュニケーション能力」を「読み書き」の能力として捉え、これを伸長する教育を入口から出口までの一貫した本学の全学的な取組として推進している。

なお、このグランドデザインに基づいて、各種方針を定め、活動を実施している。その詳細は各章で述べる。

第1章 理念・目的

【大谷大学】

【文学研究科】

大谷大学大学院文学研究科は、大谷大学文学部と上記に記した理念を共有している。本研究科と文学部とを比較するならば、建学の理念の教育的側面、つまり「仏教精神に基づく人格の陶冶」を基礎とすることはもちろんとして、研究・学問的側面、つまり「仏教の学界（世界）への解放」をとりわけ重視するところに本研究科の独自性がある。また大学院一般が担う使命と照らし合わせるならば、仏教を中心とする人文諸科学の成果の学界（世界）への解放と高度の専門的研究能力の養成とのあいだに密接な関係があることが本研究科の特徴となっている。これを受け、本学大学院は「大谷大学大学院学則」において、その目的を以下のように記している（資料1-5「大谷大学大学院学則」第1条）。

「本学大学院は仏教の精神に則り、仏教並びに人文・社会に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の発展に寄与することを目的とする。」

こうした目的を実現するために、本研究科は博士課程を設置している。博士課程は前期2年の課程を修士課程、後期3年の課程を博士後期課程とし、「大学院設置基準」第3条および第4条に則り、修士課程は、人文科学に関する高度の研究能力ないしは深い学識をもった人間を養成し、博士後期課程は、人文科学の研究者を養成する。こうした考え方を受け、「大谷大学大学院学則」には、修士課程と博士後期課程それぞれの目的を以下のように記している（資料1-5 第3条）。

修士課程

「修士課程は、学部における一般的並びに専門的教養の基礎の上に更に広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力の涵養を目的とする。」

博士後期課程

「博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。」

こうした目的を実現するため本研究科に7専攻（博士後期課程については教育・心理学専攻を除く6専攻）を設置している。

また上記に述べたグランドデザインの内容は、本研究科のめざすべき方向性をも明示したものであると位置づけている。

(2)大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。

【大学全体】【文学部】【文学研究科】

（構成員への周知方法）

本学は、毎年度の『学生手帳』に「開校の辞」および「大谷大学樹立の精神」を載せ、本学の理念・目的を教職員および学生へ周知するように努めている（資料1-6『学生手帳2014』pp.2-7）。また、先述したグランドデザインについては、2011年9月8日の教授会において学長より教員に周知した。同時にリーフレットを作成し、教職員・全学生に配布した（資料1-4）。また、2013年10月の開学記念式典後に、初代学長清沢満之の生誕150周年記念シンポジウムを開催し、建学の理念について見つめ直す機会を作るとともに、そ

第1章 理念・目的

【大谷大学】

の内容を採録した冊子体『大谷大学初代学長 清沢満之—その精神（にんげん）にせまる—』（大谷大学広報委員会 2014年3月20日発行）を作成し、2014年度の新入生をはじめとする全学生に配付した（資料 1-7『大谷大学初代学長 清沢満之—その精神（にんげん）にせまる—』）。

更に、2014年度には、建学の理念を学生、教職員が学ぶ共通テキスト『大谷大学で学ぶ—建学の精神—』（真宗総合研究所特定研究「建学の精神」教育推進研究の成果として 2014年3月31日発行）を、研究成果共有の一環として、人間学Ⅰ担当の教員および新入生に配付し、新入生の全クラスにおいて授業で使用することを確認した（資料 1-8『大谷大学で学ぶ—建学の精神—』）。

（社会への公表方法）

本学は、建学の理念を示す初代学長の「開校の辞」と第三代学長の「大谷大学樹立の精神」を本学のHPに全文掲載しており、またこれら二つの宣言に基づいた「建学の理念」の要旨を同HPで公表し、本学の理念を社会へと周知することに努めている（資料 1-1、資料 1-2、資料 1-9 本学HP「建学の理念」）。また、建学の理念に基づき、本学のめざすべき方向性を明示したグランドデザインについても、HPに掲載し、社会一般に公開している（資料 1-10 本学HP「グランドデザイン【2012年度—2021年度】」）。

各学科・専攻の教育研究目的については、各学則に基づき、HPに学科・専攻ごとにPDFで公表している（資料 1-11 本学HP「大谷大学の教育研究目的及び取得可能学位」、資料 1-12「大谷大学大学院文学研究科の教育研究目的及び取得可能学位」）。

更にグランドデザイン策定後、2012年3月31日付の『週刊東洋経済』誌に3ページの企画広告を掲載して社会に向けて告知した（資料 1-13『週刊東洋経済』2012年3月31日号 pp.5-8）。

2013年4月からは、初代学長清沢満之の教育の理念、人間性を広く紹介するために『文藝春秋』にコラムを掲載して紹介を行った。このコラムは『文藝春秋』発行後、本学HPの「読むページ」にも掲載を行っている。9月には、『朝日新聞』（大阪本社版）を使用して清沢満之の教育の理念を伝えるための広報を行い、また抜き刷りを作成して高校生を中心に配布した（資料 1-14『朝日新聞』（大阪本社版）9月15日朝刊 31面）。

2014年3月20日に発行した冊子『大谷大学初代学長 清沢満之—その精神（にんげん）にせまる—』にも『文藝春秋』、『朝日新聞』の掲載内容を収録し、全国の真宗大谷派別院、教務所を通じて全国的に配布している（資料 1-7）。

③大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。

【大学全体】

本学は、初代学長清沢満之の「開校の辞」と第三代学長佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」とに宣言された建学の理念について、従来から繰り返しその意義を検証し、大学の指針を示すものとして確かめ続けてきた。それは例えば『大谷大学百年史 資料編』の中に「大学論説集」としてまとめられている。そこにまとめられている1901年から2001年までの歴代学長の言葉から、大谷大学の理念・目的が、その時代状況の中で検証され、確かに継承されてきたことを読み取ることができる。ただし、その一方で、理念・目的の

第1章 理念・目的

【大谷大学】

適切性について検証するプロセスは明瞭であったとはいいがたい面が存在した。

そこで、2013年4月、大学運営に関する重要事項を審議・決定する組織として、学長、学監・副学長、学監・事務局長、教育・学生支援担当副学長、研究・国際交流担当副学長の5名からなる学長会を設置し、この学長会が社会的要請の変化等を視野に入れた大学・学部・研究科の理念・目的の適切性検証の責任主体であることを明確にした（資料1-15「学長会及び大学運営会議規程」）。

なお、学長会では今後の理念・目的の適切性を検証するスケジュールとして、3期（第1期2012年度～2014年度、第2期2015年度～2017年度、第3期2018年度～2021年度）に区分した「グランドデザイン」にあわせ、各期の最終年度（2014年度、2017年度、2021年度）に実施し、次期計画に反映することが適切であるとの方針を定めた。

【文学部】

これまで、本学部の理念・目的が建学の理念やめざすべき方向性等を踏まえ適切に設定されているかについては、大学の周年事業や学科・カリキュラム改編などの時々に応じ、委員会を設置して検証してきた。2013年度からは、学長会において検証作業を行うこととなり、「グランドデザイン」「大谷大学学則」「教育基本法」「学校教育法」「学校教育法施行規則」「大学設置基準」を資料として、試行的に検証作業を行った。その検証結果は、大学運営会議（学長会メンバー5名に加え、学生部長、入学センター長、文学部長（教育・学生支援担当副学長兼務）、大学院文学研究科長、短期大学部長と、企画・入試部、総務部、学生支援部、教育研究支援部の4事務部長を加えた13名からなる本学・短期大学部を合わせた全学運営の責任組織）に報告し、最終的な確認を行った。その結果、本学の理念・目的の実現のために策定した「グランドデザイン」において掲げた「仏教精神に基づき社会を主体的に生きることのできる人物の育成」という目的が、本学部の教育研究目的に反映できていることを確認した（資料1-15）。

なお、検証の結果、改善が必要と思われる事項があった場合は、学長会より教授会へ報告し、改善を指示する。

【文学研究科】

本研究科の理念・目的が、建学の理念やめざすべき方向性等を踏まえ適切に設定されているかについては、学長会において、「グランドデザイン」「大谷大学大学院学則」「教育基本法」「学校教育法」「学校教育法施行規則」「大学院設置基準」を資料として、2013年度に試行的な検証作業を行った。その検証結果は、大学運営会議に報告し、最終的な確認を行った。その結果、本学の理念・目的の実現のために策定した「グランドデザイン」において掲げた「仏教精神に基づき社会を主体的に生きることのできる人物の育成」という目的が、本研究科の教育研究目的に反映できていることを確認した。

なお、検証の結果、改善が必要と思われる事項があった場合は、学長会より大学院委員会へ報告し、改善を指示する。

第1章 理念・目的

【大谷大学】

2、点検・評価

●基準1の充足状況

本学は理念・目的を適切に設定しており、その周知方法・公表方法も適切であると判断できる。以上により、本学の理念・目的は同基準をおおむね充足している。

①効果が上がっている事項

学長会を設置したことにより、大学・学部・研究科の理念・目的の適切性検証の責任主体が明確になった。

②改善すべき事項

なし

3、将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

大学、学部および研究科の理念・目的の適切性の検証にあたって、責任主体である学長会の位置づけおよび検証プロセスを、2014年度、2017年度、2021年度の実施を通して具体化していく。

②改善すべき事項

なし

4、根拠資料

資料 1-1 本学 HP 「開校の辞」 <http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000100g.html>

資料 1-2 本学 HP 「大学樹立の精神」

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000101u.html>

資料 1-3 「大谷大学学則」(既出(序-1))

資料 1-4 「グランドデザイン【2012年度-2021年度】」

資料 1-5 「大谷大学大学院学則」

資料 1-6 『学生手帳 2014』

資料 1-7 『大谷大学初代学長 清沢満之—その精神(にんげん)にせまる—』

資料 1-8 『大谷大学で学ぶ—建学の精神—』

資料 1-9 本学 HP 「建学の理念」 <http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000km5b.html>

資料 1-10 本学 HP 「グランドデザイン【2012年度-2021年度】」

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000001mdxn.html>

資料 1-11 本学 HP 「大谷大学の教育研究目的及び取得可能学位」

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq00000012gsm-att/nab3mq00000012h9b.pdf>

資料 1-12 本学 HP 「大谷大学大学院文学研究科の教育研究目的及び取得可能学位」

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq00000012gsm-att/nab3mq0000001d584.pdf>

資料 1-13 『週刊東洋経済』2012年3月31日号 抜き刷り

資料 1-14 『朝日新聞』(大阪本社版)9月15日朝刊 31面

資料 1-15 「学長会及び大学運営会議規程」

資料 1-16 『大谷大学要覧 2014.4-2015.3』